

## ブルデュー社会学における〈政治〉

— 国家・象徴的暴力・民主政治 —

小松田 儀 貞

### はじめに

極めて多様な問題をその社会学の対象として取り上げたピエール・ブルデューだが、〈政治〉は彼の関心対象のなかでも——その研究生活においても社会生活あるいはまさしく政治生活においても<sup>1)</sup>——重要な位置を占めていたと言えるだろう。実際のところ、通常、彼の社会学は教育や文化の社会学として認知されることは多いが、一般的には政治学が対象とする政治現象を主題化する社会学、特に政治社会学として見られることは稀であろう。しかし、そうした通念上の「政治」とは違った意味でブルデューにとって〈政治〉は重い関心事であったことは間違いない。ブルデュー社会学における〈政治〉とはいかなる問題として構成されているのか。また彼の〈政治〉に関する言説からわれわれは何を読み取ることができるだろうか。

本稿ではピエール・ブルデューの社会学における〈政治〉の問題について若干の考察を試みることにしたい。

### 1 ブルデュー社会学における〈政治〉

ブルデューとの共著もあり、その社会学の重要な継承者とも言えるロイック・ヴァカンは、ブルデューと政治の問題を扱った自身の編著『ピエール・ブルデューと民主政治』(Wacquant 2005)の序論で、ブルデューは「社会的に政治的だった」(Wacquant 2005a:1)と端的に述べている。それは実際の政治的な行動の中に彼にとっての〈政治〉を直接読み取るのではなく、

むしろ学自体の中にそれを読み取るべきという主張にほかならない。ヴァカンによれば、ブルデューにとって「政治的に考えることなく政治を考える」(Bourdieu 1988:2)ことにこそ彼の姿勢が現れているのである(Wacquant 2005a:2)。以下、ヴァカンの議論を敷衍しながら本稿の課題に向かうことにしよう。

ヴァカンは、ブルデューと政治の関係を相互に絡み合う以下の三つの要素として示している(Wacquant 2005b:10-11)。(i)ブルデューその人の個人的な政治的意見、(ii)その社会学的著作において遭遇する政治、(iii)ブルデューの研究[それ自体]の政治[性]である(傍点原文強調部分)。ヴァカンが注意を促すのはこの(iii)の意味での〈政治〉である。

ブルデューの〈政治〉に向かうこの姿勢はブルデューの社会学にどのような形で現れているのか。ヴァカンは、ブルデューの関心は何より民主政治(democratic politics)に向けられているとして、ブルデューのこの問題に向かう分析原理と方法的態度を以下のように四点に集約して示している(Wacquant 2005a:2-3)。

第一に、民主制に関係するあらゆる事象の「徹底的な歴史化」を通して政治思想や政治行動を問うことである。従来の政治学そのものも含めて語彙や言説、表象は再帰的な社会学の対象となる。

第二は、民主制的实践の可能性の社会的諸条件を系統的に掘り起こすことである。

このためには焦点を二重に移行させる必要がある。一つには抽象的な観念的思考から下降して経験的に政治的現実を捉えることであり、ま

たもう一つにはフォーマルな構造に刻み込まれた政治的能力だけではなく、民主的な政治ゲーム〔駆け引き〕を行う上での行為者の広範な政治的傾向性をも捉えるということで、M・ヴェーバーの言う「受動的な政治主体」と「能動的な政治主体」の区別がいかんして生まれたかを問うことがまさにこの問いに答えることになる。

第三に、社会的なものの二つの状態のなかで存在する民主制の様態を捉えるということである。

この二つの状態とは、(行為者間の)「位置(positions)の客観的システム」と「行為者に沈殿している性向(dispositions)の主観的な束」である。前者は、政治の場と官僚制の場<sup>2)</sup>に結晶化しているものとして捉えることができ、後者は政治的ハビトゥスを構成する心的構造として理解できる。ブルデューの社会学はこのどちらも把握しようとするものである。

第四に、象徴的権力に特有の効果とそれがわれわれに仕掛ける社会的トリックに対して特別の注意を払うということである。

「政治的抗争は社会的世界の正当な見方を押し付ける権力をめぐる(実践的、理論的な)認知的抗争」(Bourdieu 1997a:221)である以上この原則は政治分析には適切である。この象徴的権力つまり行為者が世界を理解し構築する際に用いるカテゴリを守りあるいは変えることで現実を(再)形成する権力は、まさに社会学の対象である。政治についての権威ある表象を作り出す政治家やジャーナリストなどのプロと競い合い、政治家の政治的言説を疑問に付すことで社会学は政治の科学になる(Wacquant 2005a:2-3)。

ヴァカンはこのように整理して、このブルデュー社会学のまさに今日的な意義について以下のように指摘している。

市場主義的な効率性の観念や世論調査、政治的なマーケティング技術などの社会科学の派生物が「支配の合理化」を支えるものになっている現在、(そうした概念を相対化できるような)政治分析の発展は喫緊の課題となっている。実際、世界中の実学エリート校で教えられている政治経済学などの諸学は権力の正当化の手段となっている。新自由主義革命が世界中で進行す

るなかでブルデューの著作は広汎な層から多くの関心を集めているが、それは民主的な闘争の再考と刷新の知的資源を内包しているからである。ヴァカンは、このように民主政治の理論と実践に対するブルデューの豊かな貢献を評価して、そこで生起する諸現象を条件付ける「場」(champ, field)の概念を通して、政治あるいは権力の問題を考えるという政治場、権力場についての分析と考察、また近代官僚制国家の出現といった問題に対する取り組みに注目を促している(Wacquant 2005a:3-4)。

## 2 民主政治の可能性と条件への問い

ブルデューはその最晩年の論考「聖職の秘儀——特殊意志から「一般意志」へ」の中で政治場の問題の核心でもある政治的意見の形成の問題を取り上げている(Bourdieu 2001)。<sup>3)</sup>ここには彼の民主政治に対する考え方が端的に表れていると言えるだろう。

個人の意見表明としてこれほど単純明快なものはないと思われる投票という行為を、ブルデューは単に「意見の表出」として見るのではなく「意見の生産」として捉えようとする。ブルデューは自由な選択と個人を絶対視する自由主義的な哲学への批判を背景にして「集合的な」意見に注目したデュルケムの洞察を引き<sup>4)</sup>、彼が「意見の生産ないし練り上げの様式」と「その意見の表出様式」との区別の重要性を強調した点を高く評価している(Bourdieu 2001:8)。家族や職場などの人間関係の影響を排除して閉ざされた投票ボックスの中で行なわれる純粹に個人的な自由な意志の表明。投票はそういう行為として考えられているが、それは投票用紙に物質化された意見として数量的統計的な処理に付されることで、客観的な結果として自立化する。これは一つの結果として理解され、デュルケムが示したような「集合的な」意見として認識されることはない。つまりそれが集合的な行動あるいは共同的な作業の所産としては捉えられず、あくまで個人的意見の可算的な集積の形で(つまり「集列」として)扱われることになる。結果的に意見の社会的な形成過程つまり意見の生産という視点がそこから奪われること

になるのである。<sup>5)</sup>

ブルデューが批判するのは個人の意見を機械的な集積の形で把握できるとする凝集〔寄せ集め〕(agrégation)の論理である。「統計的凝集は機械的に生み出され、意見との関係付けは行為者の外部でしかも彼らの意識と意志から独立してなされる」(Bourdieu 2001:9) (強調原文)。一般的に規範的に「民主的」と考えられているこの投票の論理は、社会的被支配層(ここでは社会的弱者と考えてよい)にとっては二重に不利に働く。それは彼らが個別利害を社会的な文脈で捉える能力に関わる文化資本(専門知識や情報一般)に乏しいということ、そして彼らにとって有利にはできていない既存の社会的諸構造(個人的戦略のメニューや秩序)に対して拒否するか従属するかという選択肢しか持たないことによる(Bourdieu 2001:9)。彼らは現実の政治的意思決定の場からは排除されているのである。そういう人々にとっての抗議や異議申し立てとはどういう形でなされるのか。ブルデューの民主政治への関心はこの問いに大きく関わると言えるだろう。

ブルデューの政治場分析において重要な観点は「代表」〔代理、表象〕(representation)あるいは「委任」(délégation)の問題である。各種の団体組織、特に政党や組合のような文字通り政治的な機能を果たす制度は、個人の意志の表出を体現するかに見えるが、実際は組織の秩序を通しての「委任」という形でそれを行なっているにすぎない。発言の権限を与えられた代行者(組織の代表やスポークスマン等)を通して行なわれる発言は、当の組織の総意を代行する発言として社会的に発効する。それはあたかも代行者の個人人格と組織が一体化した一人格として発言しているかのように行なわれるのである。委任という手段に頼らざるを得ない者と代行者の間には意見の不一致が生じることは避けられない。しかしながら、そういう人々が代行者を通じて社会的に効力のある正当性を持った発言を獲得するには、委任という形態を取る以上、彼ら自身の、自分たちなりの仕方での発言が剥奪されることが条件となるのである。この委任・代行の二律背反的構造をブルデューは教会法学者の術語を引きながら「聖職の秘儀」

(le mystère du ministère)と表現している。政党や組合のような協同的団体でしばしば見られるような組織の代行者が組織から受け取る——支持者への裏切りをも含む——逆説的な権力の作用がまさにそれである(Bourdieu 2001:10-11)。

この二律背反は克服できるのだろうか。そのためにブルデューが求めるのは意見を「機械的な累積」として扱うのではなく、〔討論や出会いによる〕「交換〔コミュニケーション〕によって変わりうる記号」(Bourdieu 2001:11)として扱うことである。「どういう集団であれ集団が意見を生産しようとするとき、その意見の生産方法についての意見をまず生産すべきということを知っていることが重要」だとして、ブルデューは民主政治の可能性と条件を問うかのように、最後にこう述べている。「集合的な抗議の二律背反に陥ることなく、原子化された意見の機械的な寄せ集めを避けて、真の民主制構築に対して重要な貢献をするために、現実的に集合的な「一般意志」の(あるいは集合的意見の)形成様式を構築する社会的諸条件を創出する努力が必要である。その一般意志は、[意見の]一致や不一致を作り出すのに必要なコミュニケーション手段に対する協調を前提とする弁証法的な出会いに調整される交換に基づくものであり、コミュニケーションの内容もコミュニケーションに関わる人々も変えうるようなものにほかならない」(Bourdieu 2001:11)

「特殊意志」を意見の可算的総和である「全体意志」ではなく「一般意志」へとつなげること。ここにルソー主義的民主制に対するブルデューの期待を読み取るべきなのだろうか。<sup>6)</sup>

### 3 国家と象徴的暴力の問題

#### ——ブルデューとフォーコー

ここで再びヴァカンのブルデュー読解に目を向けたい。ヴァカンは、前掲の論考の中でブルデューの著『国家貴族』(Bourdieu 1989)の意図を読解することを通してその「象徴形式の政治社会学」(Wacquant 2005c:135)の意義を明らかにしようとしている。ヴァカンはその点について「ピエール・ブルデューの仕事の当

初から持ち続けられた中心課題と目的は、支配の象徴的次元を「取り戻し」て極めて多様な形で現れている権力の生成論的人間学を打ち立てる」(Wacquant 2005c:133) ことであると述べその論証を試みているが、本稿の課題を改めて確認する意味でも、ヴァカンがブルデューの議論をミシェル・フーコーの権力論と対比して論じている部分を取り上げて両者の理論的な核心部分をここで明確にしておこう。

国家と権力をめぐってブルデューとフーコーの間にはどんな共通性あるいは差異があるのだろうか。以下、少し長いがヴァカンの指摘を参照しよう。

民主政治の研究者にとって、『国家貴族』における分析から、ブルデューがその[国家の]論理を人々に機械的に押し付けることのできる装置(アルチュセル流の)に見られるような中央集権的な、上から末端を統制するという権力認識も、そしてまた下から生起する権力であるとか社会を形成している「網目」全体に分散している権力という——ミシェル・フーコーや彼が影響を受けた従来のものとは異なる政治学の分析家の研究に見られる——「自生主義」あるいは脱中心化された権力概念のどちらも拒絶している、ということは極めて明らかである。ブルデューがフーコーと共有しているのは、権力は個人や集団が所有する実体(substance)ではなく、権力を行使した行使される主体のまさしく構成の中に刻み込まれている何らかの社会的諸関係の結果であるということである。彼は、権力は多様な諸形態を取る(すなわちさまざまな種の資本という形態)——この諸形態は、社会分析が特定できる規定的な諸条件の下で、抵抗、反抗、自己保存の戦略のやはり多様な総体を活性化しうる——という考えについては同意している。実際、まさに「資本の諸形態」の分化やこれに対応した個々それぞれの資本蓄積と保存に向けられた社会的小宇宙とメカニズムの登場、これらこそが「権力場」という概念の形成を要請したのである。ブルデューは同様にフーコーに以下の点で同意する。権力行使は意識的意図、明示的意思決定を必然化しないし、

権力は単に抑圧的であるばかりではなく新しい諸関係と現実については「生産的」でもある、という点である。だが、この二人のフランス人社会理論家は、少なくとも二つの主要な点で袂を分かっている(Wacquant 2005c:144-5)。

ヴァカンは、まずブルデューがアルチュセルの国家像と共にフーコーの権力把握を受け入れていないという点を強調した上で、ブルデューとフーコーの間に共有される認識について言及している。そして改めて両者の間の差異を以下のように指摘している。

第一に、ブルデューはこう主張している。権力は「毛細管」(capillaries)の形で社会的なものの全体に分散しているというのではなく、一定の制度的セクターに、また社会的空間の所与の圏域に集中する。権力場とは、まさに資本の諸形態を構成する「社会的エネルギー」が蓄積し、また権力の多様な種の相対的価値が競合しそして決定される闘技場なのである。ブルデューは「微小メカニズムから発生する権力の<sup>上</sup>向的(ascending)分析」[フーコー]よりむしろ次のような諸制度の関連に焦点を当てた分析に優先権を与えている。競合する資本間のコンフリクトの仲裁者である国家によって究極的に賜下された正当化の永続的でより複合的な回路が作動している中で競合した同時に共謀している多数の行為者の一見無秩序な行為や反応を通して経済資本と文化資本の再生産を確実にする制度がそれである(Wacquant 2005c:145)。

「微細な権力の網目」に注目したフーコーに対して、ブルデューは再生産を保障する「制度」の働きに何より重要性を与えている。<sup>7)</sup> さらにブルデューは「言説」にではなく「象徴的暴力」の効果に権力作用の核心を見ようとする。

ブルデューとフーコーの間の第二の大きな差異。権力としての知(savoir-pouvoir)と異なり、象徴的暴力は規律社会の勃興における「生権力」(bio-power [bio-pouvoir])のフーコーの分析にあるような「言説」の媒介、つまり真

理への要求を含意する形式化された知識体系を前提してはいない。それ〔象徴的暴力〕が作動するのは、むしろ心的カテゴリの教化を通してである。こうした諸カテゴリはそれが生み出された客観的世界に適応しているために、それらを知覚できないものにする事で権力の諸効果を可能にするのである。〔中略〕

フーコーお馴染みの「権力、権利、真理の三者関係」の代わりに、ブルデューは権力、身体、信念の三者関係を対置する。最終的に、今日のブルジョアジーの覇権は、相互に強化し合う相同性のピラミッド全体に支えられている。この相同性は、客観的、主観的な諸構造の網目状の関係を結びつけており、信念は究極的にここから生じている。この信念は国家によって聖別化され、またその支配統治の必然性と正当性において支配層と被支配層どちらにも共有されているのである。(Wacquant 2005c:145) (強調原文)

ブルデューは『国家貴族』の中で、人々の判断力の社会的根源、学校あるいは教育システムと国家の結びつきといった問題の検討を通じて、それらを単に個別の問題としてではなく、専門技術的支配統治の諸相の間の生成的、構造的、機能的な結びつきの複雑な網目状関係として描こうとした。ここに彼の考える現代国家の姿が見て取れる。ブルデューは官僚制機構(官僚制場)とその担い手(官僚、国家エージェント等)の制度的生産に重要性を認めている(Wacquant 2005c:145)。

歴史社会学的考察を踏まえたブルデューの国家把握の独自性は、国家を「物理的暴力」(M・ヴェーバー)のみならず象徴的暴力の「正当の使用の独占を持続的に要求する」存在として捉えることにある。本稿ではさらなる考察の余裕はないが、やはりブルデューとフーコーの認識を分かつポイントの一つはここにあると言えるだろう。社会的に被支配的な位置にある人々の言葉や声そして意識を象徴的次元で疎外しあるいは抑圧する権力すなわちその意味での暴力。「権威のあらゆる現実態を保証する象徴資本の(中央)〔\* ヴァカンの付加〕銀行」(Bourdieu 1993b:57; Wacquant 2005b:17)である国家が、

そういう存在だからこそ行使しうるこの特殊な権力についての深い考察が、当の社会における民主政治のあり方についても深い認識をもたらすはずである。<sup>8)</sup>

## 結びにかえて

ヴァカンによれば「民主制の可能性の社会的諸条件の科学」を彫琢することはブルデューの持続的な企図だった。ブルデュー自身、1970年代の論考のタイトルにあるように「言葉を持たない人々に言葉を与えること」にその社会学の社会的役割があると考えていたことは確かだろう(Wacquant 2005b:10)。ブルデュー社会学における課題としての〈政治〉とは、真の(と敢えて言うべきだろう)民主制の希求にほかならない。

ブルデューの民主政治への関心は国家についての考察と切り離せないものである。というより真の民主制なるものを構想しその実現を期待するならそれを可能にする国家について考えることが不可欠となるだろう。ブルデューは国家という存在に向き合う場合、分析の中心に近代官僚制(場としての)を置くが、それを単に機構上の実体として見るのではなく、それを主観的客観的に構成する要素を別々に切り離さずに、総体として認識しようとしている。「国家的思考」の分析や教育・文化と学校システムの問題への接近、そして民衆の政治参加への視線など、その多様で系統的な分析と考察から学ぶべき点は多い。『国家貴族』はもちろんのこと、その晩年に発表された歴史社会学的考察や国家研究の構想<sup>9)</sup>にさらなる探求の道筋を見出すことにわれわれの課題は残されている。

## 註

- 1) 青年時代のアルジェリア経験など、ブルデューの政治との個人的な関わりについては、Wacquant 2005b:11-13等参照。
- 2) ヴァカンは、政治場を政党や政治家が一般市民サービス提供を競い合うほぼ自律的な小宇宙とし、官僚制場については「ブルデューはこの概念を練り上げて、国家を公共財の定義と操

作をめぐる闘争の場として捉えなおしている」と説明している (Wacquant 2005a:3)。

- 3) 2001年9月の日付が付されているこの論考は、Bourdieu 1997bと共に英訳が Wacquant 2005に収められている。またここでの主題の多くは、Bourdieu 2000とも重なっている。
- 4) 「投票が個人以外のものを表現するためには、つまり、それが集合的な精神の原理によって動かされるためには、基礎的な有権者集団が、この例外的な状況のためだけに集り、互いに面識もなく、かれらの意見を相互に陶冶するのに役立つこともなく、投票箱の前をただ次々と行進するだけの個人から成りたっているものであってはならない。反対に、基礎的な有権者集団は、投票日に一時的に形をなすといったものではない集団、構成された、凝集度の高い、恒久的な集団でなければならない。その場合には、それぞれの個人的な意見も集合体のなかで形成されるので、幾分なりとも集合的なものとなる。同業組合がその要請 (*desideratum*) に応えることは明らかである。それを構成する人びとが、そこで絶えず緊密に関係しあっているから、かれらの感情は共に形成されて、その共同体を表現するからである」(デュルケム 1974:144)
- 5) ブルデューは、個人行為の論理にとどまり政治行動を経済行動の一形式として扱う論理としてM・フリードマンの教育サービスの購入の例、A・ハーシュマンの「離脱」(exit)と「発言」(voice)の例を引いている (Bourdieu 2001:8)。この論理は世論調査においても同様に見出すことができる。この点については「世論」特に世論調査の機能に根底的な疑義を投げかけた論考 Bourdieu 1980を参照。
- 6) 1980年代から2000年代にかけて拡大した新自由主義的な政策と経済情勢は、フランスのみならず世界各地で貧困や社会的排除といった事態を生み出し、またそれを通じて多くの人々に深い痛みをもたらした。(『世界の悲惨』(Bourdieu 1993a)はそうした人々の声を形にしたものでもある) そうした中で政府や議会、政党そしてマスコミあるいは労働者の味方であるはずの労働組合は人々の「意志」を反映するべく政治的な役割を果たしたのか。彼・彼女らの「言葉」や「声」はどこに、どのように届けられたのだろうか。この時代的コンテクストは、民主制という理念の再考を求めたとは言えないだろうか。先に見たように民主政治がブルデュー自身の持続的関心の対象であったことは間違いないが、

2001年9月という日付を通してこの一見ナイーブな表現の時論的な背景を読み取るべきだろう。

- 7) この点については「制度〔制定〕の儀礼」についての議論 Bourdieu 1989:140-162参照。
- 8) ヴァカン こうした国家の性格に注目して、国家が行使する社会的正当化論 (*sociodicy*, *sociodicée*) の正/負の機能として捉えている。彼によれば、国家は信用証明の保証 (正の社会正当化論) と刑罰表徴の賦課 (負の社会正当化論) の担い手にほかならない (Wacquant 2005 b:17)。
- 9) Bourdieu 1997b; Bourdieu, Christin, Will 2000参照。これらの主題について筆者は既に若干の考察を行っている。小松田 2006; 小松田 2007参照。

## 文 献

- Bourdieu, P., 1980 "L'opinion publique n'existe pas," *Questions de sociologie*, Editions de Minuit, pp.222-235. (P・ブルデュー (田原音和監訳) 『社会学の社会学』藤原書店1991年所収「世論なんてない」)
- , 1988 "Penser la politique," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 71-2, pp.2-3.
- , 1989 *La Noblesse d'État. Grandes écoles et esprit de corps*. Editions de Minuit.
- , 1993a *La Misère du monde*. Seuil.
- , 1993b "Esprits d'État. Genèse et structure du champ bureaucratique," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 96-97, pp.49-62.
- , 1997a *Méditations Pascaliennes*, Seuil.
- , 1997b "De la maison du roi à la raison d'État: un modèle de la genèse du champ bureaucratique," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 118, pp.55-68.
- , 2000 (avec Philippe Fritsch) *Propos sur le champ politique*, Presse Universitaires de Lyon.
- , 2001 "Le mystère du ministère: des volontés particulières à la «volonté générale»," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 140, pp.7-11.
- Bourdieu, P., Christin, O., Will, P.-E., 2000 "Sur la science de l'État," *Actes de la recherche en sciences sociales*, 133, pp.3-11.
- Durkheim, E., 1950 *Leçons de sociologie*, PUF,

- [\*ブルデューが参照するのは1990年版] (E・デュルケム (宮島喬、川喜多喬訳) 『社会学講義』みすず書房、1974年)
- 小松田儀貞, 2006 「「王朝国家」から「官僚制国家」へ——ブルデュー社会学における国家生成の一モデル——」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第7号、1～6ページ
- , 2007 「ブルデューの国家研究構想——「国家の科学」の条件——」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第8号、1～10ページ
- Wacquant, L. (ed), 2005 *Pierre Bourdieu and Democratic Politics*, Polity.
- Wacquant, L., 2005a "Introduction: Symbolic Power and Democratic Practice," pp.1-9.\*
- , 2005b "Pointers on Pierre Bourdieu and Democratic Politics," pp.10-28.\*
- , 2005c "Symbolic Power in the Rule of the "State Nobility", "pp.133-150.\*
- [\*は Wacquant, L. (ed), 2005 *Pierre Bourdieu and Democratic Politics*, Polity に所収。]